

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 **黎**



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0040号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成19年8月20日

英霊の 嘆きの声か 蟬時雨 — 靖国特集号

皇紀二六六七年・灼熱の靖国



拝殿に向う人々

狭い部屋のカーテンを開けると、眼前に紺碧の空が広がっている。あれから六十二年後の今日、東京は炎暑の夏だった。浮世の垢に塗れた六根を清浄し、恒例となった水団を食した。聞くところによると、安倍内閣の閣僚は誰一人として、今日という日に靖国神社に詣でないという（帰宅後、高市早苗沖縄担当相が参拝したことを知った）どいつもこいつも根性なしの恥知らずばかりだ、政治家としての信念というものが無いのだから、近年このように腹立たしい八月十五日を迎えた覚えがない。願わくは、九段の柱に眠る英霊の怒りが鎮まることを・・・。

いつまで続く「曖昧戦術」

地下鉄を降りて長い階段を上ると、恰も英霊の魂の叫び

を代弁するかのよう灼熱の太陽が憤怒の形相で待ち受けていた。道行く人は皆、英霊に詫げるかのように頭を垂れて靖国神社へと歩を進める。前に行く若い夫婦は、額に汗を浮かべて歩く幼子の手を引き、汗を拭いながら黙々と歩いている。六十余年前、このような幼子を護る為、愛する祖国を護る為、尊い命を国に捧げた先達の心中を慮る時、靖国の桜から聞こえてくる蟬時雨が胸に突き刺さる。



安倍曖昧首相

朝方のテレビで知ったことだが、小泉前首相が本日午前八時過ぎ、昨年に続いて二年連続で、この特別な日に昇殿参拝をした。もともと安倍首相は、小泉前首相より靖国神社への思い入れが強いと言われているが、自らの参拝については「参拝するか、しないか申し上げるつもりはない」と相変わらずの「曖昧戦術」を取り続けている。しかし、ジリジリと焼けるような暑さの中、私の目の前を、両親に手を引かれ参拝に向う幼子の姿を見ても、安倍

首相の心は動かないのだろうか、それでも「曖昧戦術」を取り続けるといふのだから、**日の丸を掲げる老人の思い**



日の丸を掲げる老人

拝殿に向う参道には様々な老若男女で溢れていた。戦死されたご主人の写真だろうか遺影を抱えた老婦人がいた。先祖の慰霊にやってきた家族連れもいた。中でも私の目を惹いたのは、炎天下にも拘らず大日章旗を掲げて歩く左の写真の老人だった。聞けば、「靖国で会おう」のひと言を遺して華と散った戦友との約束を果たす為にやって来たという。それぞれの思いと願い

を込めた八月十五日の正午は数十分後に迫っていた。**誰が何を反省しろと言っのか**

拝殿に設置されたスピーカーから日本武道館で行われている「全国戦没者追悼式」の様子が流れてきた。声の主は安倍首相だった。スピーカー

から聞こえる声は「深い反省とともに、犠牲となった方々に謹んで哀悼の意を表します」と言っている。首相は「深い反省」と言うが、誰に何を反省しろというのか、まさか日本に反省しろと言っのではあるまい、深い反省をしなければならぬのは「ABC包囲網」なる姑息な手段を用いて日本を戦争に引きずり込んだ連合軍ではないのか、広島や長崎に原爆を投下して無辜の市民を大虐殺したアメリカではないのか、非戦闘員をシベリアに拉致して、劣悪な環境下で我が同胞を奴隷の如く扱ったソ連ではないのか、そして誰よりも反省しなければならぬのは、本日、英霊の前に額づかなかつた安倍晋三自身である。

英霊の 嘆きの声か 蟬時雨



英霊に届け！正午の黙禱

安倍首相の挨拶が終了すると拝殿横では、護國青年會議

副議長長谷田部浩士氏が拝詞を奉った。(別掲)

正午の時報を合図に拝殿周辺を埋め尽くした人々の心がひとつになり一分間の黙禱を捧げた。静寂が辺りを支配する異空間の中、目を瞑れば様々な思いが去来する。

「昨年、政府のトップである内閣総理大臣が会いに来てくれた時、長い間騙され続けてきた我々の無念の思いが少しは報われた気がしたが、今日また裏切られてしまった。政局になることを回避したいのか、支那に遠慮しているのか、そんなに我が身が可愛いのか、我々はこんな男が『日本丸』の舵取りをするために日本国を護つたのではない、我々が日本国内閣総理大臣に望む事は一年に一度でよいから我々に会いに来て欲しいということだけだ。たったそれだけのささやかな我々の願いが踏み躪られるとは、まさに断腸の思いである」凛とした静寂の中、今年もまた、十六万五千人の耳に英霊の嘆きの声が蝉時雨となつて聞こえてきた。

海行かば 水漬くかばね
山行かば 草むすかばね
大君の 辺にこそ死なめ
かえりみはせじ

皇紀二六七年八月十五日

編集人・戸出蒼流

靖国神社拝詞

掛ケマクモ畏キ靖国神社ノ大御前ヲ拝ミ奉リテ恐ミ恐ミモ白サク
天皇ノ大御代ヲ手長ノ御代ノ敵御代ト堅磐ニ常磐ニ齊イ奉リ幸ヘ奉リ給イ天下四方ノ國民ニ至ルマデニ御英霊ノ廣キ厚キ恩頼ヲ彌遠永ニモ豪ラシメ給イ家門高ク身健ニ世ノ為人ノ為ニ盡サシメ給ヘト恐ミ恐ミモ白ス

いとも畏い靖国神社の御前に謹んで申し上げます。天皇の大御代が長く久しく栄え、おごそかな御代と永遠にお祝いし、幸いならしめ給い天下のすべての国民まで御英霊の広大な神徳を長く久しく蒙らせて家運も隆昌で健康で世の為人の為にも尽くすことができまますようにと恐れ謹んで申し上げます



祝祭日には
国旗を
掲揚しよう
日刊 ひぐらし

安倍内閣、参拝したのは高市早苗沖縄担当相だけ!!

首相の言う「戦後レジームからの脱却」とはいつたい何だったんだらうか・・・、今日十日「安倍内閣の全閣僚、十五日靖国参拝見送り」のニュースを聞き愕然とした思いとともに「夢であつて欲しい、悪夢に違いない」と念じたが「安倍首相も参拝は見送る意向だ」とメディアが憐れ願いを木っ端微塵に打ち砕いた。



孤軍奮闘した高市沖縄担当相

救われたのはたった一人だが十五日午後、高市早苗沖縄担当相が靖国神社を参拝して英霊に哀悼の誠を捧げたことだ。氏は、反フェミニズムを標榜し、政治活動を続けている。また米国のレーガン政権や英国のサッチャーに代表される新保守主義者としても名を馳せている。高市氏の参拝により全閣僚不参拝という不名誉はかろうじて回避できたが、安倍内閣の体たらくは変わらない。

断ち切られた英霊の熱き思い

安倍首相の言う「戦後レジームからの脱却」とは六十余年前の国家存亡の戦いに、愛する国を護る為、愛する人を

護る為、尊い命を国に捧げた英霊の熱き思いを断ち切るということなのか。

首相が参拝を見送った背景には、参院選に大敗したことへの反省と謹慎の意があると、或いは逆風の中、政局にしたいくないからだ、はたまた支那に配慮してのことだと、分かったような評論家やキャスターがいるが、バカなことは言つな！日本には内閣総理大臣は一人しかいない、政府のトップが内閣総理大臣であるという事実は、初代首相・伊藤博文の時代から不変である。その政府の命令で戦地に赴き、散華された英霊がおられる靖国神社に、後の首相が詣でて感謝と哀悼の誠を捧げることが、極めて当然なことであり、むしろそれは義務でなければならぬ筈だ。

国家百年の計を問うた選挙ならばともかく、たかだか年金選挙に負けたからといって、特定アジアに遠慮して重大な義務を履行しないとは本末転倒であり、首相の責任は甚大である。

前総理の参拝と真夏の悪夢

その理念や信念はさておき前首相は二年連続で八月十五日に靖国神社を参拝した。昨年の参拝では、マスコミが批判的スタンスをとりながらも賛否両論取り混ぜて大々的に報じたことから、靖国神社に

興味を持ち、日本国を誇りに思う若者が着実に増えてきていることは喜ばしい限りである。しかし、あれからまだ一年しか経っていないというのに、一人の女性大臣を除いて閣僚全員が参拝しなかった。何という恥知らずな奴等だ、何という恩知らずな奴等だ、こんな馬鹿野郎共が日本の政治を動かしているとは真夏の夜の悪夢に違いない。

何処へ消えたか「美しい国」

『静かなる 歳月(とし)を数えて 蝉の声』
この句は小紙の熱心な愛読者である私のかげがえのない友人から寄せられたものだが、この句を読むと時の流れとともに靖国に眠る英霊の思いに心を馳せることができる。靖国の神々は、こんな日本を残す為に、こんな日本を護る為に散華したのではない。先達の無念を思うと、汗とともに一筋の涙が頬を伝う。

これほどまでに大和民族の矜持を喪い、犬畜生にも劣る奴等が跋扈する日本を見た英霊の嘆き悲しむ声が、蝉時雨となつて聞こえてくる。日本人ならば、国に殉じた英霊に額つき、感謝と哀悼の誠を捧げる事は義務である。それができないならば総理自身の著「美しい国へ」はチリ紙交換用の資源ゴミと化したと謂わざるを得ない。

編集人